

【  
愛  
し  
の  
人  
】  
改  
定  
版

作  
・  
藤  
田  
ヒ  
ロ  
シ

マリア……………

20・女 長い闘病生活に終わりが見えて来て、学校に通える日を待ち望んでいる。

千晶……………

33・女 有能な医師でありながら、教授の娘・マリアの専属医師として共同生活をしている。

○イントロダクション

マリアが写真立てを手に立っている。

マリア　ママが産み落としたこの身体にはママが流れている。それが親子の証なのか、それとも私がママの一部だからなのか……。

写真立てを眺める。

マリア　ママ。私は今日十九歳になりました。同じ病気だと知った時は、こ

の目を迎えられないと思っただけ。だけれど、ママが病氣と闘ってくれたお陰ね。今この命が繋がっている。ママ、ありがとう。

写真立てに触れる。

マリア　この指、この目、この唇……鏡を見る度、そこには私、そのはずなのに……。笑っているのも、泣いているのも、私のはずなのに……。

○アリアの暮らす家、リビング

テーブルと3つの椅子

マリアが座っている。ノートと本を持って千晶が入ってくる。

千晶　こちらでしたか。

マリア　ベッドから出られるようになったと言うのに、自分の部屋に籠っているなんて嫌なの。いいでしょ？

千晶　「勉強したい」と言い出したのはマリアさんですから、場所は何処でも構いませんよ。

マリア　（座ろうとしたのを止めて）先生、それは正確じゃないわ。私は「学校に行きたい」って言ったのよ。なにも数学や物理や歴史を学びたいわけじゃないし、テストでいい点数を取りたいわけでもないの。あの時止まった時間を動かしたいだけ。もう一度「続き」から始めたいのよ。なのに。パパったら。「勉強ならこの家でやればいい。学校へ行く必要はない」だもの。大学の教授でもあるのに学校に行く事を否定するなんてどうかしてるわ。先生もそう思うでしょ？

千晶　マリアさんの事が心配なんですよ。ベッドから出られるようになってまだ一カ月です。焦らないでください。

マリア　（不機嫌なまま）心配、心配って私はもう子供じゃないのよ！

千晶 (マリアをじっと見つめる)

マリア どうしたの？

千晶 一つ聞いていいですか？

マリア 何かしら？

千晶 どうして勉強の時だけ私を「先生」と呼ぶのですか？

マリア 気が付いていたの？

千晶 もちろんです。

マリア 先生は「先生」って呼ばれる事に慣れているからごく自然に受け入れていると思っていたわ。

千晶 マリアさんはずっと私を名前で呼んできましたから違和感はありませんよ。

マリア 「先生」って呼ぶのは、その方がほんの少しだけ「学校」の雰囲気が出るからよ。

千晶 では――

マリア 私にとって医者とは「先生」と呼ぶ存在じゃないの。きっとあまりにも身近過ぎるのね。勉強の時以外での「先生」って呼んでほしい？

千晶 お好きなように。

マリア よかった。それならこのままね。あ、でも私は止めてほしのよ。先生の敬語。

千晶 それはできません。マリアさんは患者であり、教授の娘さんですから。

マリア 一つ屋根の下に暮らして家族も同然でしょ？

千晶 (一瞬の間の後) 私はマリアさんの担当医であり教授の助手です。そして、今は家庭教師。

マリア パパは共同研究者と言うわ。

千晶 助手ですよ。

マリア 私はどちらも正確ではないと思っているけど、どうかしら？

と、じっと千晶を見る。

千晶

質問の意図が分かりかねます。

マリア

私はもう子供じゃないのよ。

千晶

(微笑みを返す)

マリア

(膨れる)

千晶

さあ、今日は古文ですよ。

と、本をマリアの前に出す。

マリア

「古文」！？

千晶

なにをそんな……(驚きの理由に気づきクスリと笑い)マリアさん。理系人間だからって古文が嫌いとは限りませんよ。古の文学、美しきこの国の花鳥風月を綴った物もさる事ながら、人間の本質、欲望、愛憎を描いた作品、私は大好きですね。

マリア

(気の無い感じで)ふーん。

と、本をパラペラとめくる。

千晶

(呆れたように)紅茶を淹れてきましょう。

と、立ち上がり去る。

マリア

ありがとう。

今度は本を手にしてパラペラとめくるマリア。あるページで止まり、

マリア

(たどたどしく)【わが袖は 潮干(しほひ)に見えぬ 沖の石の人こそ知らね 乾く間もなし】

意味がわからず現代語訳を黙読。

「私の袖は、引き潮の時でさえ海中に隠れて見えない沖の石のよう。他人は知らないだろうが、涙に濡れて、乾く間もない」

その後再び、

マリア

(ハッキリと)【わが袖は 潮干(しほひ)に見えぬ 沖の石の人こそ知らね 乾く間もなし】

紅茶の入ったポットとカップ2つをトレーに乗せて千晶が戻って来てトレーをテーブルに置く。

マリア

(本を目にして)素敵なお一首を選びましたね。

と、紅茶をカップに注ぐ。

マリア 偶然。選んだわけではないわ。

千晶 そうですか。

マリア 好き？

千晶 はい？

マリア 千晶さんはこの一首好き？

千晶 好きですよ。

と、カップをマリアの前に置き、

千晶 こういう事は学校では出来ない事ですよ。

マリア そうね、学校には決まり事が多くて不自由。

千晶 それでも行きたいですか？

マリア もちろんよ。この家での不自由さとは比べものにならないもの。

千晶 不自由ですか？

と、自分のカップに紅茶を注ぐ。

マリア 何でも揃っていて、何でも与えてもらえる。(カップを手にして)不自由よ。

と、カップに息をかけ、紅茶を飲む。それを見て千晶も。

千晶 (同時に)では始めましょう。

マリア (同時に)ママはどんな人だった？

千晶 え？

マリア どんな人だったの？

千晶 (本を手にして)「勉強がしたい」のでは—

マリア 先生の「先生」だったんでしょ？

千晶 私じゃ不満—

マリア どんな人だったの？

千晶 (本を置いて)先生ではなく「指導医」です。

マリア 「指導」……先生ではないの？

千晶 「先生」と言うならそれは教授、お父様の方ですよ。

マリア パパとママ、二人の教え子。千晶さんは他人ではないね。

千晶 ……。

マリア それで、どんな人だった？ 厳しかった？ 優しくかった？

千晶 (少し笑って) 男社会の中で媚びることなく、諦めることなく、凛として堂々。間違っていると思えば相手が教授でも一歩も引かない方でした。

マリア 怖そう……。

千晶 確かにミスには激しく叱責されました。でもそれはミスが許されない医者と言う仕事への覚悟を問う厳しさ。怖いと感じた事はありません。

マリア 千晶さんが優秀だったからでしょ？

千晶 そんなことはないですよ。一番叱られていました。

マリア 本当に！？

千晶 (頷いて) だから一番あの人の優しさも知っている。決して見捨てはしない。激しく叱責し、それ以上に激しく激励してくれた。私の意見に耳を傾け、相談にも乗ってくれて……「信念を持ちなさい。そうすれば道は開かれる」その言葉は今も私の支えです。

マリア ……私とは全然違う。

千晶 そんなことありませんよ。マリアさんも――

マリア (真剣に) 似ている？ 私、ママに似ているの！？

千晶 え？

マリア 親子だもの似ているところはあると思うわ。でもパパが言うの。「笑った顔なんて出会った頃のママだね」って。(問い詰める口調で) 本当にそう？ 私とママ、本当に！？

千晶 ……どうした――

マリア 違うわよね？ 私はママではないでしょ？

千晶 マリアさん？

マリア 「絶対にお前を救う。治してみせる」と言い続けるパパにママの時と同じ想いはさせたくなかった。だから嫌いな検査も黙って受けた。何度も何度もね。アレが食べたい、ココに行きたい、それは我儘なんだと心に押し込めた。何個も何個もね。そして、私はベッドから出られるようになり、パパは喜んだ。でもそれは私が病気を克服したからじゃない。

千晶 そんなことは――

マリア 「私が」じゃないの！「絶対にお前を救う。治してみせる」それは私への言葉ではなく、パパが治そうとしていたのはママ。救えなかった後悔なんてない。パパにとってママはずっと生きていて、ずっと治そうとしていた。ベッドに寝ていたのは私ではなくママ。パパはずっと「続き」の中に居いて、今も――（言葉が途切れる）

千晶 マリアさん、興奮しないで――

マリア 私を「姫」とか「天使」とかそう呼ぶ、そんな親バカな愛情は恥ずかしい。だけど嫌じゃない。だけど、今はそれとは違うものを感じるの。「笑った顔なんて出会った頃のママだね」その言葉の端に……（息が乱れる）

千晶 少し休みましょう。

マリア （手で制して）その視線の強さに感じるの！（一層息が乱れる）

千晶 マリアさん、もう喋らないで――

マリア この指、この目、この唇……パパは大人になってゆく……娘に……私に――（言葉を飲み）誰よりも傍で見ている千晶さんならわかるでしょ！？誰よりもパパを見ている千晶さんなら気付いて――

千晶 もう喋らないで――

マリア わかっているのでしょ！？

千晶 少し休みま――

マリア 千晶さん！

千晶 お願いです。もう――

マリア 助手だからって娘の世話なんてしなわ！

千晶 マリアさん！



マリア 医者としてのキャリアを捨てて私の世話なんてしなわ！

千晶 マリアさん！

マリア 嫌！私はもう子供じゃないのよ！どうして認めないの？一つ屋根の下、家族同然……それだけで満足？違うでしょ？

千晶 お願いです。もう止めて下さい。

マリア (同時に) もうママいない。その席は空いている。座ってよ。お願いだからパパを奪ってよ。私をパパから解放してよ。自由が欲しいの！私はママなんかじゃない！私でいいの！認めてよ。パパの事を――

千晶 (同時に) お願いです。もう止めて下さい！もうそれ以上言わないで！もうそれ以上、その目で、その唇で……もう黙って下さい！黙って！マリア！

と、マリアの頬を叩く。

静寂

千晶 あ、ああ！ごめんなさい！ご、ごめんなさい、ごめんなさい！私ったら、叩くつもりなんてなかったの！許して！許してください！！ごめんなさい！！

と、マリアを抱き締める。しばらくそのまま。

マリア ……千晶さん。

千晶 ……ごめんなさい。

マリア い、痛い。苦しい。

千晶 (ハッとし、手を離し) ごめんなさい。

マリア 謝らないで。

千晶 許してくれるのですか？

見つめ合う二人。

マリア その目。同じだわ。

千晶 この目？誰と？

と、バッグから薬と注射器を取り出す。

マリア

どうして？

千晶

何がですか？

と、素早く注射を用意する。

マリア

どうしてパパと同じ目で私を見るの！？止めて！その目で私を見ないで！！

千晶

あなたは何もわかってはいない！まだ子供よ！

と、注射を打つ。

マリア

違う！私はもう子供じゃない！子供なんかじゃー

気を失い倒れるマリア。

千晶

そうやってムキになるところ、子供なのよ。

マリアをイスに座らせる。

千晶

（淡々と語り出す）この指、この目、この唇が浴び続けた卑猥の視線。自分が医者でもなく、人でもなく、ただの女でしかない事を思い知らされた。でも先生は示してくれた。媚びることなく、諦めることなく、凜として堂々。先生が屈することなく闘ってくれたから、私は私として生きていられる。その恩に報いたい。誰よりも強く深く、応えたい。（マリアを見つめ）この指、この目、この唇……本当に。

と、マリアの髪にそっと手を触れ、

マリア

先生が産み落としたこの身体には先生が流れている。それが親子の証なのか、それともマリアが先生の一部だからなのか……先生、命を救いましたよ。「良くやった、千晶」と、褒めてくれますか？抱きしめてくれますか？千晶——そう呼んでくれますか？

と、マリアの手を自分の肩にかける。

FIN

無断での使用・転用・転載禁止